株式会社DND — コラム / AI活用

AIが、AIを呼ぶ時代になった
マルチエージェントで業務フローを丸ごと自動化する考え方

2026年9月19日 発行

この資料の要点

- マルチエージェントとは、役割の異なる複数のAIが協調して一連の業務フローを自動化する仕組みです。
- 2026年、A2AプロトコルとMCPの普及により、複数AI間の連携設計が現実的なコストで可能になりました。
- 中小企業は「引き継ぎが頻繁な業務」から始めると効果が出やすく、スモールスタートが鍵です。

マルチエージェントとは何か

マルチエージェントとは、役割の異なる複数のAIエージェントが協調し、一連の業務プロセスを分業してこなす仕組みです。「調査担当」「判断担当」「実行担当」のように役割を分け、互いに処理結果を渡し合いながらフロー全体を完走させます。

> 一人でこなせない複雑な仕事を、専門が異なるメンバーで分業する——その人間の仕事術を、AI同士の連携に応用したのがマルチエージェントです。

なぜ2026年に注目が高まっているのか

A2Aプロトコルの登場とLinux Foundation移管

Googleが提唱し、2026年にLinux Foundation傘下へ移管された「A2A（Agent-to-Agent）プロトコル」は、AIエージェント同士が直接通信するための標準規格です。異なるベンダーやフレームワークで作られたエージェント同士が、共通の「言葉」で呼び合えるようになります。

MCPとの組み合わせで「縦と横」がそろう

MCPが「AIと社内システムの接続（縦方向）」を標準化するなら、A2Aは「AIとAIの連携（横方向）」を標準化します。縦と横の両方が整ったことで、マルチエージェントシステムの設計コストが大幅に下がっています。

ノーコード・ローコードツールの対応

n8n・Dify・Makeなどのワークフロー自動化ツールも、複数エージェントを視覚的に配置・接続できる設計が一般化しています。

中小企業での活用シナリオ3つ

① 顧客問い合わせから回答・記録まで一気通貫

「受付エージェント」が仕分け→「調査エージェント」がFAQ検索→「回答草案エージェント」が返信文を生成→「記録エージェント」がCRMに登録。担当者は必要な承認ポイントでのみ確認します。

② 営業支援：リード情報収集から提案書の下書きまで

新規リード入力→「情報収集エージェント」が企業情報を収集→「課題抽出エージェント」が接点を整理→「提案書エージェント」が下書きを生成。営業担当者は下書きへの肉付けと最終確認に集中できます。

③ 経理支援：請求書から仕訳確認依頼まで

請求書PDF受取→「OCR・抽出エージェント」が項目を読み取り→「仕訳候補エージェント」が勘定科目を仮設定→「差異検出エージェント」が前回比較→「依頼エージェント」がSlackで確認依頼。

設計で押さえたい3つのポイント

- **まず「引き継ぎが多い業務」を選ぶ：**担当者が変わるたびに情報を転記している、ツール間のコピペ作業が多い業務をターゲットにします。
- **人が確認するポイントを最初に決める：**「この判断だけは人が確認する」という承認ポイントを最初に設計します。全自動化は段階的に。
- **1フロー×3エージェント以内でスモールスタート：**n8nやDifyを使えばこの規模であれば数日で試作できます。

株式会社DnDでは、AIエージェントの業務フロー設計・導入支援を承っています。

「どのフローから始めればいいかわからない」という段階からご相談ください。

→ https://dnd-inc.jp/contact.html

© 2026 DnD Inc. — Distill n Develop. | https://dnd-inc.jp/blog/multi-agent-workflow-automation.html